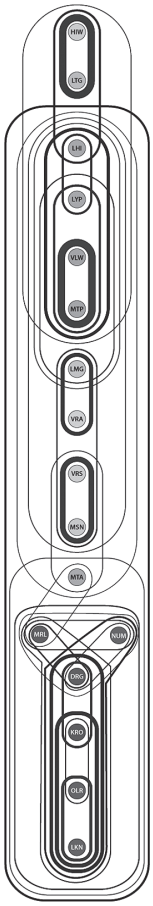
PROJECT

悩ましい「系統図」という存在

文
菊澤律子

共同研究 ● 言語の系統関係を探る──その方法論と歴史学研究における意味──（2009-2012）

一般に言語の系統関係は系統図で示される。一方で、言語接触やその結果生じる借用は、ふたつ（もしくはそれ以上）の言語の間で系統関係とは無関係に起こる。したがって系統樹モデルで表現できない古典的な例と考えられており、接触の結果起こる言語変化の表現方法としては、中心点から周りに向かって波状に伝播することを示す波動モデルが例とされることが多い。ただしこれまで、波動モデルが系統樹モデルにとってかわることはなかった。それぞれのモデルにおいて表現される言語間の関係の性質が異なるのだから、ある意味、当然であろう。しかし最近、言語学における系統研究では、これが必ずしも「当然」ではないままきているのではないか、と考えさせられる出来事が続いている。



ヴァヌアツにおける言語の関係を波状モデルの組み合わせで示そうとしたもの（François, A. & S. Kalyan 2011）。

系統図の呪縛

たとえばヴァヌアツ言語の専門家 A. フランソワは、まだよくわかっていない南太平洋のヴァヌアツ共和国北部の島々で話される言語の系統関係を解明しようと、自らがフィールドワークに赴いてデータを集め、分析を始めた。ところがどんなにがんばっても、データの分析結果は系統樹の形にはおさまらない。数年間苦しんだ後にこのモデルが「絶対」ではないことをはじめて意識した彼は、系統図を全否定するに至った。その後、S. カルヤンと共著で言語の歴史を表すモデルとして史的地理計量法（historical glottometry）を提唱する（François and Kalyan 2011）。これは、ヴァヌアツの言語が言語鎖を形成しながら広がっていったことを、波状モデルの組み合わせで示そうとするものである。

確かに有根系統図は、同族関係にある言語、すなわち同じ祖語から発達した言語の系統関係がその研究対象であった歴史言語学において長らく「デフォルト」であり、波動モデルを除けば、ほぼ唯一の存在と言ってもよかった。近年、言語変化や過去の言語の分布状況をより動的にとらえるアプローチが増えるに従い、系統図で表現し得ない現象が「問題点」という形で指摘されるようになったのは、この事実を反映しているのであろう。方言鎖を系統図に組み込むという試み（Ross 1988）もそのひとつと言える。

しかし、もともと系統樹モデルが数ある選択枝のひとつにすぎないという認識であるならば、単に文脈に応じて他の適切なモデルを選べばよいだけであり、系統樹モデルそのものを問題視する必要はない。逆の見方をすれば、系統樹で万事こと足りていた時代には、言語変化の研究における方法論が画一的であったのか、それとも、このモデルによって表現できるものの概念が言語学者の意識のなかで今よりはっきりしていたのだろうか。

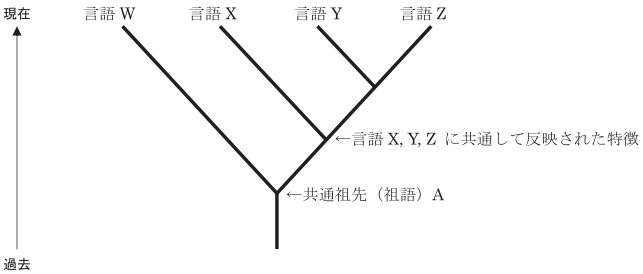
言語系統図が表現するもの

それにしても、言語系統図によって示されるのは、言語のいったい何なのか？フランソワがヴァヌアツの語彙データと格闘していた頃、私の方は、この疑問に対する答えを模索していた。

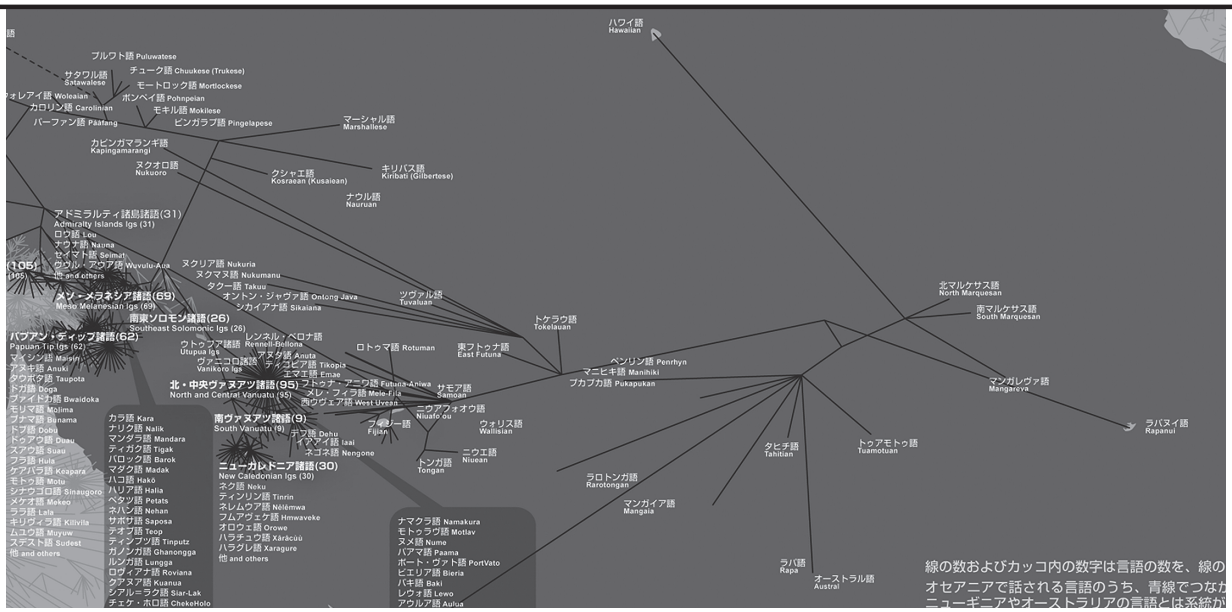
教科書的な答えとしては以下の通りである。言語系統図とは、1）共通祖先 A から発達したと特定できる言語を対象に、2）特定の歴史変化を共有する言語ごとのグループに分類したものであり、言語の類縁関係を示している。ここでは詳細に立ち入ることはしないが、1）の「共通祖先 A から発達したかどうか」については、伝統的な歴史言語学における系統関係特定の手法、「比較方法」を適用し、音韻的な特徴、すなわち言語間に規則的な音の対応がみられるかどうかを検証する。2）の「特定の歴史変化を共有する」とは、共通祖先 A とは異なる音韻面での特徴がみられる場合、これらの特徴が A から分岐した後に起こったなんらかの言語変化を反映すると考える。そして、この変化を共有する一連の言語は同じ下位グループに属しており、「系統が近い」と分析する。

オーストロネシア語族に属する言語は、このような手段により特定された系統関係が比較的はっきりしていることで知られている。さらに、系統図と現在話されている言語の地理的な分布をつきあわせることで、オーストロネシア系の言語を話す人々（以下、オーストロネシアン）の移動ルートに関する学説をたてることができ、太平洋・環太平洋地域における民族移動の軌跡を知る主要な手がかりとなってきた。私が系統図の意味を考えるきっかけとなったのは、この移動ルートとの絡みからである。

言語の系譜に基づく移動の軌跡は、必ずしも、考古学や遺伝学に基づく移動の軌跡と一致するとは限らない。いずれの分野においても方法論が「完璧」ではあり得ないだけでなく、



系統図が表すもの。ひとつひとつの結節点（ノード）は、その下に属する言語の共通祖先を示している。



民博のオセアニア展示場にある言語パネル。オセアニアの言語の系統関係を実際に言語が話されている地域と結びつけてみた。

学説をたてる際に基礎となるデータにギャップがあるからである。むしろ、食い違いが生じた理由を各分野において精査することで移動学は前進する。ただしそのためには、つきあわせている内容が対応していなくてはならない。けれども私は、他分野の研究者が「言語学の成果とは異なる動き」を主張するとき、その理解が「ずれている」と感じる経験を何度か重ねていた。

たとえば、言語の系譜に基づくと、オーストロネシアンは、台湾から南下してフィリピンからインドネシアに拡散したとされる。これに対して仮に、考古学においてフィリピンから台湾に北上するモノの動きが証明されたとしよう。これだけでは、言語学と相反するデータだということにはならない。なぜなら、1）このモノの動きはオーストロネシアン以前のものかもしれないし、2）オーストロネシアンがフィリピンに定住後、台湾にもどる、あるいは台湾と行き来する動きがあったのかもしれないし、3）そもそも、人の移動を伴わない交易関係を反映するのかもしれないからである。いずれも、言語系統図に反映される言語の系譜とは別次元の話であり、言語データに基づく南下説と矛盾しない。言語系統図に現れるのは、現時点で話されている言語に反映された「おおまかな」言語の分岐の軌跡であり、後続する地理的に遡る移動や、「細かな」接触関係はそもそも除外されている。しかし、「おおまかな言語の分岐」、「細かな接触関係」とはなんぞや？そしてそれを、どのように他分野の研究者に説明すればよいのか、というのが私が直面していた疑問点であった。

それでも系統樹モデルにこだわる

直接の答えではないが、生物学者で系統樹学の専門家でもある三中信宏氏の考察は、私にはいくつかの鍵とこれからの考え方を提供してくれるように思える。「もし実際に『由来関係』がみつかり、系統樹が描けたならば、現在私たちが見ているもの [⋯] の背後には過去からの系譜の流れがあるわけです。そして、その流れに沿ってさまざまな特徴の変化のありさまをたどることができるでしょう。つまり、系統樹はさまざまなもの [⋯] を系譜に沿って体系的に理解するための手段です。」（三中 2010：25-26）

言語学における比較方法で得られるのは、まさに、このことばの「系譜の流れ」に関する知識であろう。それに基づいて言語学者は、これまで、ことばの特徴の変化をたどってきた。近年では、上に述べた史的地理計量法以外にも、言語接触のように比較方法が対象としてこなかった要素を含めてまとめて扱うような新しい研究（Lee and Hasegawa 2011 など）もみられるが、この、次のステップに進むために、私たちは今立ち止まって、言語系統図という形でこれまで蓄積されてきた成果をまず新しい目でとらえ直す必要があるのではないだろうか。

というわけで、2013 年 2 月には、本プロジェクトの締めくくりとすべく、上に引用した文献の著者三中氏を筆頭に、遺伝学、言語情報学、文献学等の専門家を迎え、「樹について考える」シンポジウムを開催する。どんなディスカッションが展開するのか、さらにその結果をこの先の言語の系統関係に関する研究にどう結びつけて行くことができるのか、今から楽しみにしている。

【参考文献】

François, A. and S. Kalyan. 2011. "Language history in Vanuatu: The epic failure of the tree model". Paper presented at the Centre for Research on Language Change, Australian National University, Canberra.

Lee, S. and T. Hasegawa. 2011. Bayesian phylogenetic analysis supports an agricultural origin of Japonic languages. *Proceedings of the Royal Society of Biological Science 2011* 278: 3662-3669. doi: 10.1098/rspb.2011.0518.

三中信宏 2010『系統樹思考の世界－すべてはツリーとともに』（第４刷）講談社現代新書 1849 講談社。

Ross, M.D. 1988. *Proto Oceanic and the Austronesian Languages of Western Melanesia* (Pacific Linguistics Series C, 98). Canberra: Pacific Linguistics.

きくさわ りつこ

民族文化研究部准教授。専門は、オーストロネシア諸語を対象とした比較（歴史）および記述研究、比較統語論、言語類型論、オセアニアの先史研究。著書に *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*（Pacific Linguistics 520, 2002）、論文に "The movement of people and plants in the Pacific: Reconstructing culture-history based on linguistic data"（*2009 International Symposium on Austronesian Studies*, 2010）など。